

編集後記

編集長(ダン シロウ)

第43号の新連載は、河野暁子さんの「この世界で生きるあなたへ～国境なき医師団の活動をふりかえって～」。そして本間毅さんの「コロナ禍の中、幾度となく会い、語り合うことの意味を考える」の二つです。

執筆陣が増えて、ますます多方面の対人援助コンテンツが溢れてゆきます。11年も続けていると、様々な場所で本誌のもたらす意味が花開いているように思います。これからも人々の暮らす舞台全体に目配りの効いた連載を招きたいと思います。遠慮なく、執筆希望をお知らせ下さい。「連載すること」と「学会員になって頂くこと」だけが条件の執筆募集を常時行なっています。

43号の原稿締め切り直前が妻の百ヶ日だった。時の経つのが早いのか、そうでもないのか。2020年はコロナに振り回された一年だったが、私には忘れられない年でもあることになった。

そして長らく続けてきた東日本大震災家族応援プロジェクトが、ひとまず十年の最終年予定だった。しかしコロナ禍によってスケジュールは大きな変更を余儀なくされ、2021年に最終年を持ち越すことにした。

では2020年をどう過ごすか、思案の結果、昨今の必然のようにzoom開催が実行された。結果としてこれが、2021年以降、つまり10年を経た後の東北、特に福島との関わり方の今後の形を提示してくれた。村本邦子さんの連載にいずれ登場することになるだろうが、対人援助の営みは、様々な想定外を乗り越えて、息長く静かに積み重ねられていくものである。

編集員(チバ アキオ)

ASMR(Autonomous Sensory Meridian Response)自律感覚絶頂反応(じりつかんかくぜっちょうはんのう)の話息子たちがしている。心地よい音が話題になっている。これを書いている今、私がヘッドホンで聞いているのは台所での料理の音。グツグツ煮込み、包丁でまな板についた野菜を集める音、水を切る音…。はじめはそうでもないが、少し時間がたちメインのしていることに意識

の集中が向くと、どこに今いるのかを失い、音に付随した記憶が脳の端に浮かんでいることに気づく。台所の音は、子どもの頃、熱を出して学校を休んでいるときを思い出す。勝手に気分は夕方。でも外を見ると真っ暗な20時過ぎの大学。家ですらない。若い頃はリラックスをしたくて、図書館でよく環境音のCDを借りた。カセットに録音したり、100円均一にも置かれるようになると集めたり。秋田への帰省のため日本海沿いを車で走る時は、あえて車内を波の音にしたり、山道が続くときは小鳥のさえずる森の音にしたり。そんなことが長距離ドライブのストレスを軽減する。音を消すには音というのが一つのマスキング手段。タイヤの音、風切り音、エンジンの音に飽きるので、そういった音がちょうどいい。寝床で、湖を船で行く本を読んでいるときには湖のBGMもよかった。秋の虫の声、カエルの田んぼでの合唱、温泉の音…様々な音をYOUTUBEで聴いている。

コロナ禍で人の往来が減った生活が続く。行く場所が減ると景色も会う人も限定的で、当然日常にきく音も減っているだろう。音は近くにいかないと聞こえないものもある。日常生活に現れる他者が減ったことを「ズーム」で少しでも取り戻し、音を失ったことを「ASMR」でも埋める。これまでは当たり前前に休みになると祖父母の家を訪問。当然そこで聞いてきた生活音がある。いつもなら訪問する年末年始。さて、どう過ごすか。ラインのビデオ通話では母が「もう会えないかもしれないね」と手をふる。何も起こらない時代も場所もないことを経験し、それでも前に進む私たち。

対人援助学マガジンの新展開プランが上がっている。ズームや音がキーになりそう。そんなプランも聞こえてくるのも今だからこそ。

編集員(オオタニ タカシ)

マガジン42号の執筆者短信で、執筆者の小池英梨子さんが『えっ!?もう前回のマガジン発行から3ヵ月も経つ!?って毎回思ってしまう』と書いておられたのを見て思わず笑ってしまいました。同じように思ったことのある執筆者の方も多いかもかもしれませんし、編集員の私も同じ感覚です。

日々の仕事とは別に、少し長めの周期性がある仕事を持っておくことが実は大事なかもしれない、と思うようになりました。周期性のある仕事は、定期的に特定の

誰かと顔を合わせる機会にもなります。3カ月に一度編集長と出会うのもそうですし、年に一度足を運ばせて頂いている福祉施設でもお馴染みの面々との再会があります。お互いのこれまでの経過も知っている関係の中で、“最近どうですか？”と近況の報告をし合い、また次の再会を予定してお互いの日々の中に戻っていく。お互いに変化したもの、蓄積したものを感じながら、一緒に時間を重ねていけることの豊かさを感じます。何となくですが、船が港に寄港するイメージが思い浮かびます。

昨年末に『執筆者と読者の集い』を企画・開催しました。いつも読んでいる連載の執筆者の方と直にお会いできるのは、感慨深いものがありました。コロナの影響で今年は前回のような合宿スタイルでは実施できませんが、このような企画も定例化できれば、1年に一度の定点になるかもしれません。いつかお目にかかれる日を楽しみにしながら、今回も無事に紙面でご一緒できたことをとてもうれしく思っています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻43号

第11巻 第3号

2020年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第44号は2021年03月15日
発刊の予定です。

原稿締切2021年02月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンル

からの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

この四人は京都府の児童相談所勤務時代、四万十川ゴムボート下りに初挑戦した面々である。左から、飯田博は亡くなった。川崎二三彦は子どもの虹研修センターで、今や日本の児童虐待ムーヴメントに、欠かせない人である。私はここにいて、鎌田得宏は今、京都市内の保育園に勤務している。

近年、アウトドアブーム、ソロキャンプブームで道具の話がやたら賑やかである。この当時、モンベルKKがまだスタートしたばかりで、浮かぶ防水バッグがえらく高かった記憶がある。

三十年も前、私がそそのかしているおっさん達が揃って、四国の川を太平洋に向かって漕ぎ下った。これを皮切りに、いくつかの川を下りにいった。

川遊びは楽しい。特に水量の確保された当時の四万十川は、水中メガネで透明度の高い水中を見ながら流されていると、空を飛んでいるような気分させてくれた。

(2020/12/15)